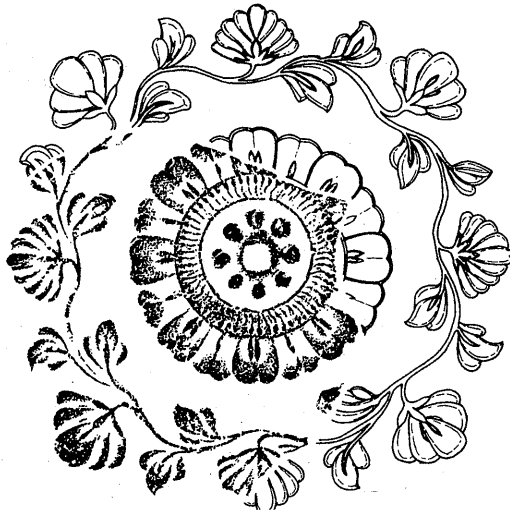


# 太宰府・佐野地区遺跡群 IX

前田遺跡第8・9・10・11次調査

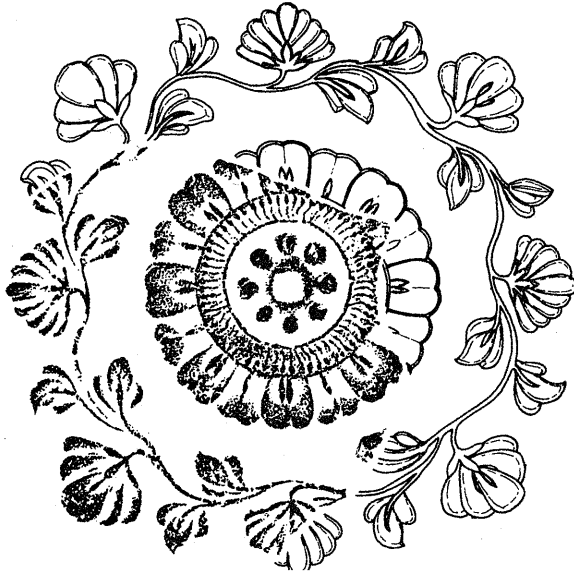


1999

太宰府市教育委員会

# 太宰府・佐野地区遺跡群 IX

前田遺跡第8・9・10・11次調査



1999

太宰府市教育委員会

# 序

本書は平成2年度から7年度にかけて佐野区画整理事業にともない太宰府市が発掘調査をおこないました佐野地区遺跡群のうち、大字向佐野に所在します前田遺跡の第8次から第11次までの調査報告を集成したものです。

前田遺跡は弥生時代、古代を中心とした遺跡ですが、旧石器時代の石器から中世の遺構面までを検出しました。

今回はコンピュータの普及にともない情報提供の新たな試みとして報告書の体裁を印刷物からCD-ROM版に重心をおいてデジタル化を進めました。これによりさらに多くの情報を盛り込むことができたと考えております。本書が太宰府市の歴史を考え、これからの太宰府市を創造していく一助になれば幸いです。

最後になりましたが資料の提供やご指導いただきました各機関、先生方、さらには発掘調査および整理作業に御協力いただきました作業員の皆様に感謝申し上げる次第です。

平成11年3月

太宰府市教育委員会  
教育長 長野 治己

## 例 言

1. 本書は平成2年から7年までに太宰府市教育委員会が、太宰府市がおこなう佐野区画整理事業にともない緊急発掘調査をおこなった前田遺跡第8～11次調査の報告書である。
2. 遺構の実測及び写真撮影は、各調査担当者のほか瓜生秀文・塩地潤一・井上信正・河田聡・柴田剛・立田理・林大智がおこなった。調査地の空中写真は（有）空中写真企画がおこなった。遺構全体図はアジア航測（株）に委託した。
3. 遺構の実測には、国土調査法第II座標系を使用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限り座標北（G.N.）を示し、本文中に記される遺構の角度及び距離もこれを基準としている。
4. 出土した金属製品及び木製品の保存処理は下川可容子がおこなった。
5. 遺物の実測と写真撮影及び図版の浄書は、各整理担当者のほか塩地潤一・井上由紀子・松隈里恵子・酒井三保子・阿部浩子・白水文恵・黒木美幸・時津裕子がおこなった。
6. 本書の執筆分担は目次に記した。編集作業はデジタルデータ化まで各整理担当者がおこない、とりまとめを城戸康利がおこなった。

## 目 次

|                   |      |
|-------------------|------|
| I. この報告書の使用方法について |      |
| II. 調査地の位置と歴史的環境  | 山村信榮 |
| III. 調査の概要        |      |
| 1. 第8次調査          | 山村   |
| 2. 第9次調査          | 城戸康利 |
| 3. 第10次調査         | 井上信正 |
| 4. 第11次調査         | 高橋学  |

## CD-ROM目次

|               |    |
|---------------|----|
| I. はじめに       | 山村 |
| II. 調査組織      | 山村 |
| III. 調査記録     |    |
| 1. 前田遺跡第8次調査  | 山村 |
| 2. 前田遺跡第9次調査  | 城戸 |
| 3. 前田遺跡第10次調査 | 井上 |
| 4. 前田遺跡第11次調査 | 高橋 |

# I. この報告書の使用方法について

## 1. 報告書の構成

本報告書は印刷物とCD-ROMにより構成されており、印刷物では遺跡の概要をかいつままで記述しています。CD-ROMに収納しているファイルが従来の印刷された報告書の内容を持つもので、遺跡の詳細についてはこれをご覧ください。

## 2. CD-ROMについて

本CD-ROMはMacintosh／Windowsどちらの環境でも閲覧できる様、ハイブリッド形式で記録しております。

報告書はPDF形式にて作成されていますので、これを表示させるためにはAcrobat Readerがコンピュータにインストールされている必要があります。

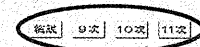
また、Acrobat Reader（米、アドビシステムズ社製、フリーウェア）は本CD-ROM内に添付してあります。ただし、Macintosh用Acrobat Reader4.0はPower Macintosh専用になっていますので、それ以前のもの（CPUが68040シリーズのもの）にはAcrobat Reader3.0の方をご使用ください。その他、動作環境及びインストールの詳細に関しては、ソフトウェア内に添付の説明テキストがございますので、そちらの方をご参照願います。

### PDFドキュメントの説明

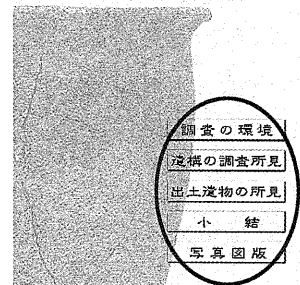
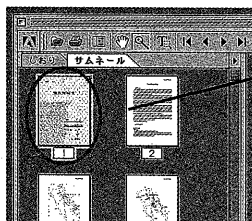
・PDFドキュメントは全部で5ファイルの構成になっています。（序から総説までがtop.pdf。以下、各次の報告書がM08.pdfからM11.pdfにそれぞれ対応します。）

・各ファイルは独立して起動できますが、それぞれのファイル間は表紙のボタンをクリックすることで、インタラクティブに移動できるようにリンクが設定してあります。

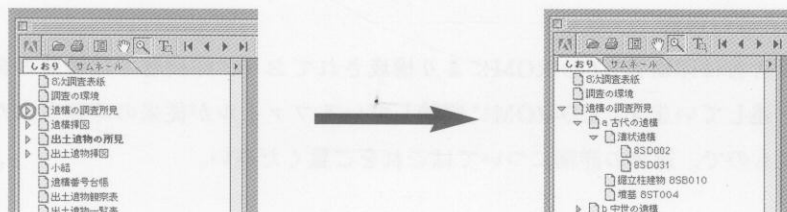
・各項目へは各次表紙のメニューボタンと詳細な内容のしおりが用意してありますので、クリックで移動できます。  
また、サムネールをダブルクリックしても該当のページにジャンプすることができます。



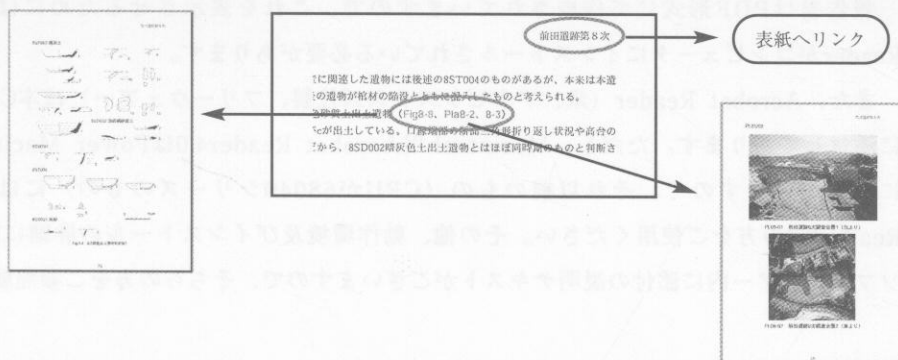
### 第8次調査



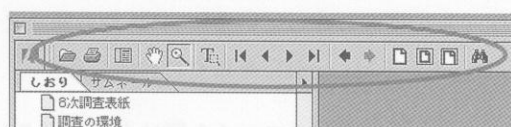
・しおりの左側に三角マーク（Mac版のみ、Win版は「+」マーク）が表示しているものは、それをクリックするとより詳細な階層メニューが現れます。



・また、本文中の色文字（水色、緑、青）になっているものは、その該当ページにリンクが設定してありますので、クリックするとそれぞれ挿図や写真や表紙にジャンプできます。



・Acrobat Readerのツールバーにも様々な機能が用意されています。



しおり、サムネールの表示/非表示

ドキュメントのプリントアウト

最初/最後のページへ

ズームインツール（拡大）  
Mac/Option、Win/Ctrl キーと合わせてズームアウトツール（縮小）

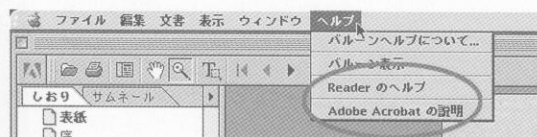
前/次のページへ

手のひらツール（画面スクロール）  
AcrobatReader 4.0 の場合スペースバーでこのツールが使えます

前/次の画面へ（表示履歴に準拠）

画面の表示モード切替（原寸、全体、幅合わせ）

・より詳細なソフトウェアの解説がヘルプメニューから呼び出せますので、そちらもご覧下さい。



・以上、Macintosh版のキャプチャーを使っていますが、Windows 版も機能は同じです。

## II. 調査地の位置と歴史的環境

佐野地区は玄界灘に開けた福岡平野の南端、太宰府市の南西に位置する。南西方向には標高1000m級の背振山があり、本報告の前田遺跡はそこから派生する丘陵裾と福岡平野の最南部が接する位置にあり、地区内を南西から北西に流れる大佐野川は南の筑紫野市二日市方面から流れる鷺田川と合流し、水城を越えて博多湾に北流する。太宰府市は玄界灘に連なる博多湾に面した福岡平野と有明海に面した筑後平野を溝状に繋ぐ一番狭い場所にあたり、古代にはこの地形を利用して防衛施設としての水城が築かれている。

弥生時代では遺跡の密度からいえば北の春日市の岡本丘陵を中心とした大集落群と南の筑紫野市から小郡市にまたがる三国丘陵から夜須町にかけての筑紫平野北側の集落群に挟まれた形となり、両地域に比べれば点々とその痕跡が辿れるに過ぎないと考えられてきた。しかし、この佐野地区ではじまった調査によって、すでに報告した地区の北にある原口遺跡では弥生前期中頃（板付Ⅱ式期）に5棟の円形住居からなる集落跡が、前田遺跡とは大佐野川を挟んで対峙する難川、フケ遺跡では弥生後期から終末、古墳時代の初頭にかけての低湿地を利用した木製品貯蔵、加工の場所や堀立柱建物からなる集落の跡などが検出され、さらにそれに切られる形で板付式期に該当する円形に展開する前期集落が発見された。近年では御笠川北岸の四王寺山裾の国分～水城地域で濠を伴った中期の集落も発見され、不鮮明であったこの地域の弥生時代の様相が次第に明らかにされつつある。

歴史時代にあつては地区内を東西に横たわる字宮ノ本の丘陵は過去の調査で「買地券」（墓誌）を伴った大宰府官人（推定）の葬送の場所として利用されていたことが判明しており、その後の調査でこの墳墓群の葬送の時期が奈良時代に遡り、下限は10世紀代におかれることがわかってきた。また、隣接する前田遺跡において水城西門から大宰府政庁にいたる道幅約10mの古代官道が発見され、先の宮ノ本墳墓群の地理的位置づけに、付加すべき新たな情報を提供している。

今回の前田遺跡10、11次調査は弥生時代前期、後期の集落の中核部分の一角を開けた調査であり10次では古代官道の一部が検出されている。前田遺跡8、9次調査は古代の墳墓のあり方や広がり、官衙的な建物群の外縁部に存在する金属関連や水稻の生産を伴う集落、中世の集落などを考察するためには重要な発掘調査である。

### 参考文献

- 『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅰ～Ⅷ』 1989～97 太宰府市教育委員会
- 『宮ノ本遺跡』 1980 太宰府市教育委員会
- 『宮ノ本遺跡Ⅱ』 1992 太宰府市教育委員会
- 『太宰府市史考古資料編』 1993 太宰府市

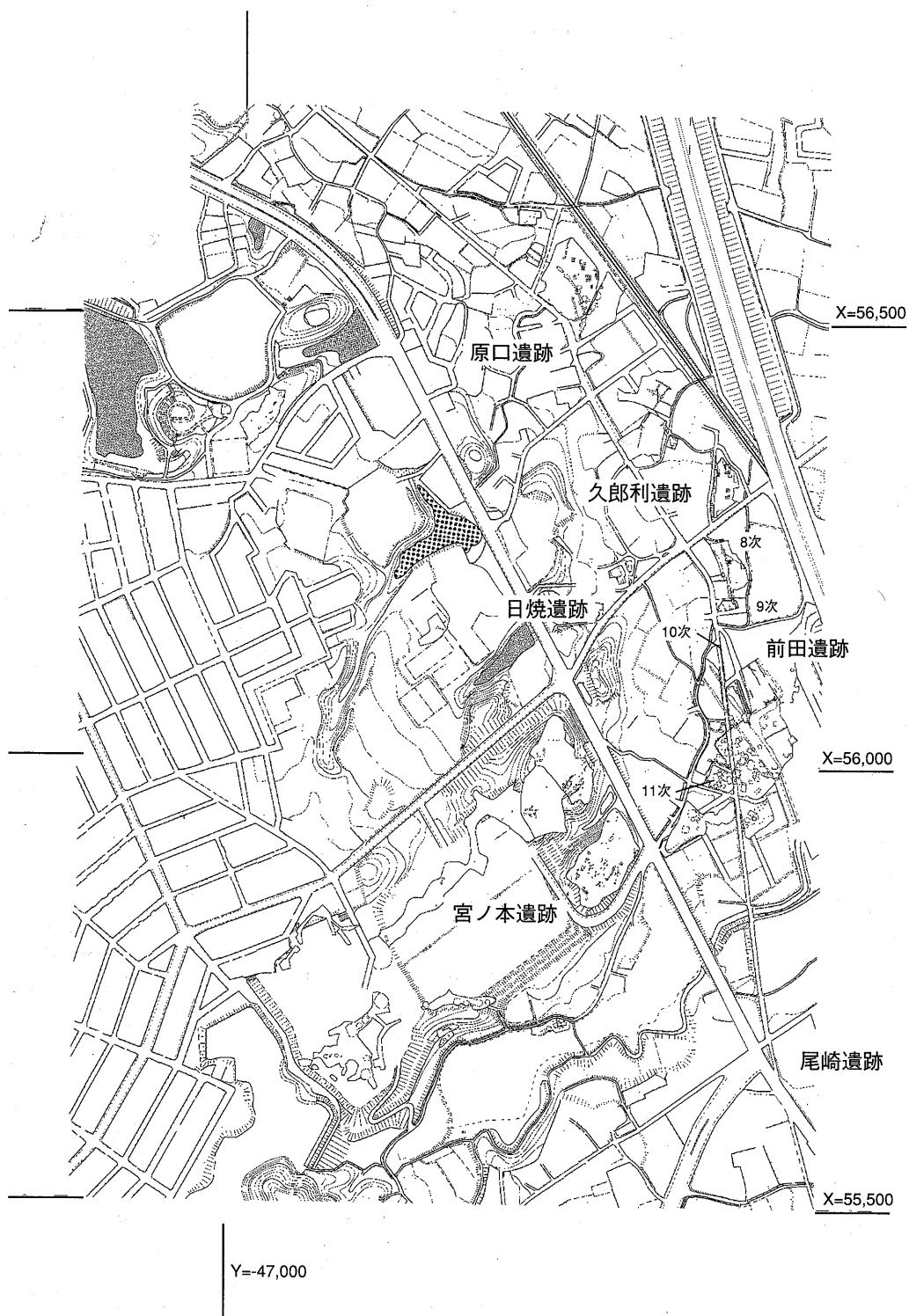


図1 佐野地区周辺の遺跡



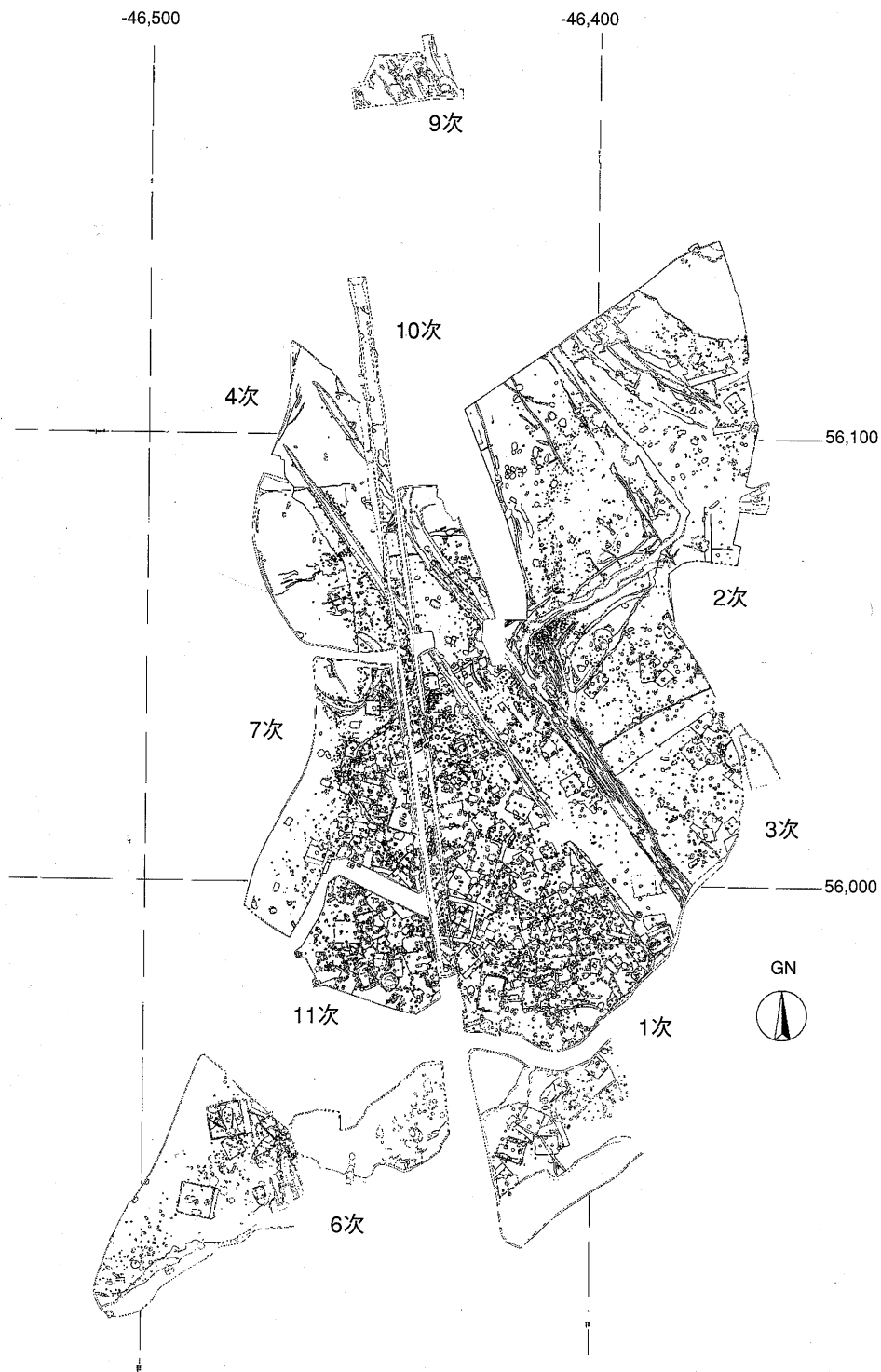


図2 前田遺跡調査区位置図

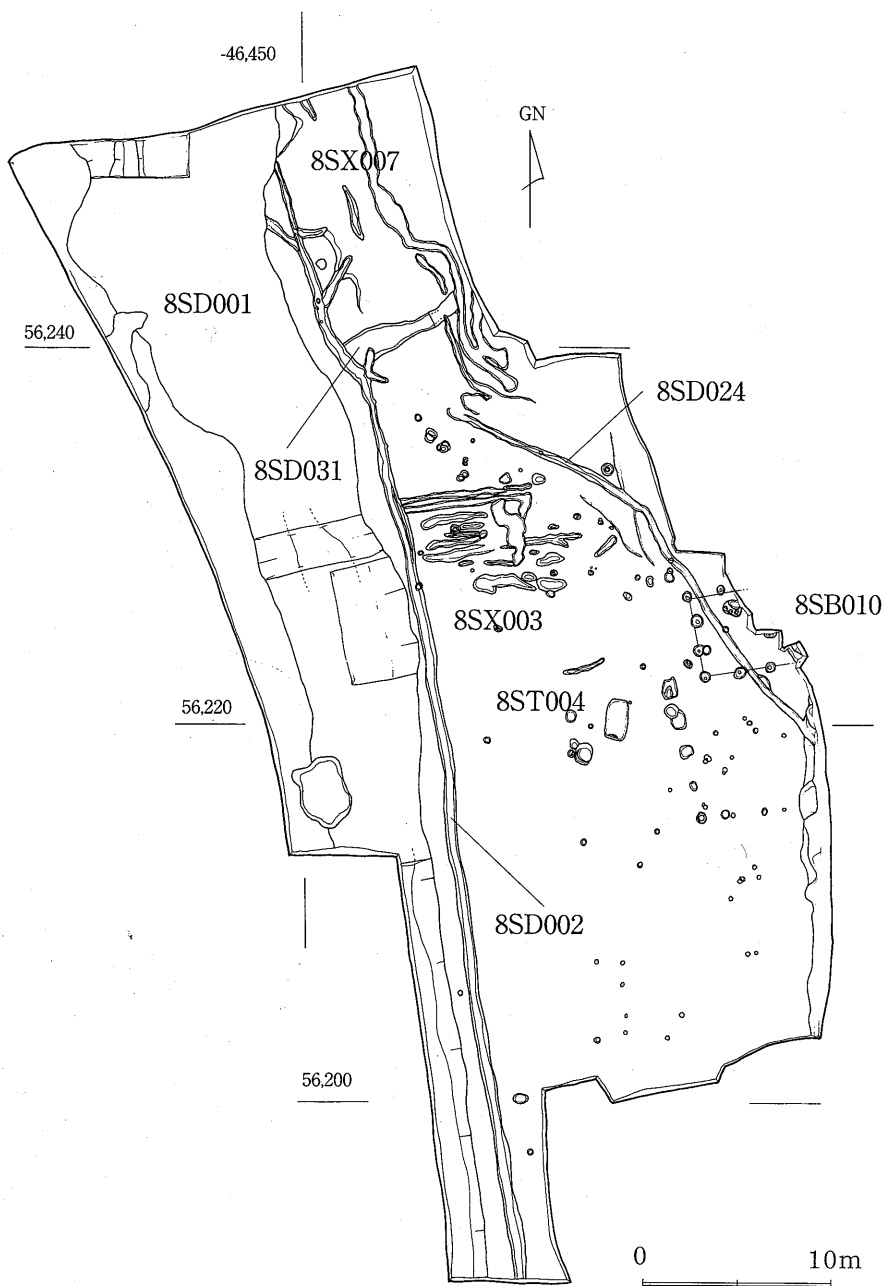


図3 第8次遺構配置図 (1/400)

### Ⅲ 調査の概要

#### 1. 第8次調査

前田遺跡8次調査で明確にされた所見は、古代にあっては金属生産に関連した遺物を伴う8世紀中頃以降の遺物の分布が認められ、その時期に該当する掘立柱建物と水田給水施設としての

一定の方向性を持った溝が検出されたことが挙げられる。中世では古代の水路とほぼ同じ方向を踏襲する大きな溝があり、13世紀後半から14世紀前半頃の生活廃棄物がその埋没過程で投棄された状況が見られ、至近に集落が存在することを示唆している。

8世紀については周辺の調査所見をあわせて考えると、この丘陵裾の平坦部には8世紀前半に幅12mの古代官道が敷設され、中頃から後半にかけて官道の側溝が埋没する過程で金属生産を伴う掘立柱建物を中心とした水田を伴う生活空間が現れる。この空間の北側に近接する原口、久郎利遺跡では官衙的な建物群が展開している。

8世紀後半から9世紀には官道が廃絶する、という展開が見られる。

## 2. 第9次調査

旧水田面の下で南東から北西または北に向かう溝を数条検出した。前9SD001は幅約3m、深さ1m程で、12世紀中頃までの遺物を含む。前9SD002の掘り直しの可能性がある。前8SD001に続くものである。前9SD002は幅約3m、深さ約0.6mである。前9SD005は幅約3m、深さ約0.4mで、前9SD002に切られている。前9SD004は幅約2.5m、深さ約0.2mで、近世以降の埋没である。前9SD006は幅約0.7m、深さ約0.2mを測る。前8SD002と同一のものである。奈良時代までの遺物を出土している。前9SD001から剥片尖頭器を出土した。

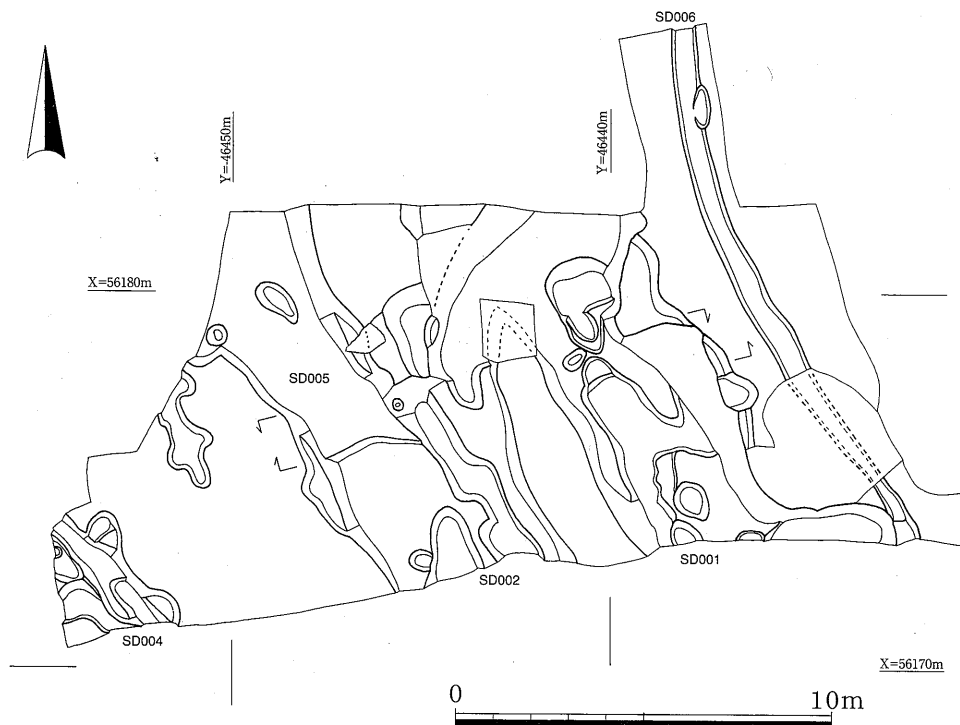


図4 第9次調査遺構配置図 (1/200)



第8次調査全景（北から 奥は天拝山）



第9次調査全景（上が東）

### 3. 第10次調査

佐野地区区画整理事業に伴い道路の付け替えが行われ、その旧道部分を調査した。いずれも調査範囲が狭いため、詳細については今後の周辺調査区での成果に委ねる部分が多い。

#### 【弥生時代前期】

本調査区の西側の前田遺跡第7次調査（既報告）を中心に弥生時代前期の集落が同心円状に展開しているが、本調査区の南側がこの集落の東側にあたる。ここでは住居は検出されなかったが、貯蔵穴が6基検出された。各遺構とも遺物量は少ないが、前10SK025は比較的まとまって遺物が出土している。

#### 【弥生時代後期～古墳時代前期】

調査区南側一体で、当時の竪穴住居・溝等を検出した。本調査区の範囲が狭いため、隣地調査区で同一遺構が検出される場合が多く、本調査区のみでは全体像を把握するのが困難である。周辺調査の整理報告とあわせて、今後再検討する必要がある。なお前10SD005および前10SD035について、本調査区内では直接両遺構の関連はわからないが、周辺調査区の成果よりこの両者は同一遺構とみられ、方形周溝等と考えられる。

#### 【奈良時代】

調査区北側で、北西－南東方向に走行する溝が2本平行に検出された（前10SD001・前10SD100）。周辺調査成果より水城西門を通る官道側溝とみられる。なお両遺構に挟まれた

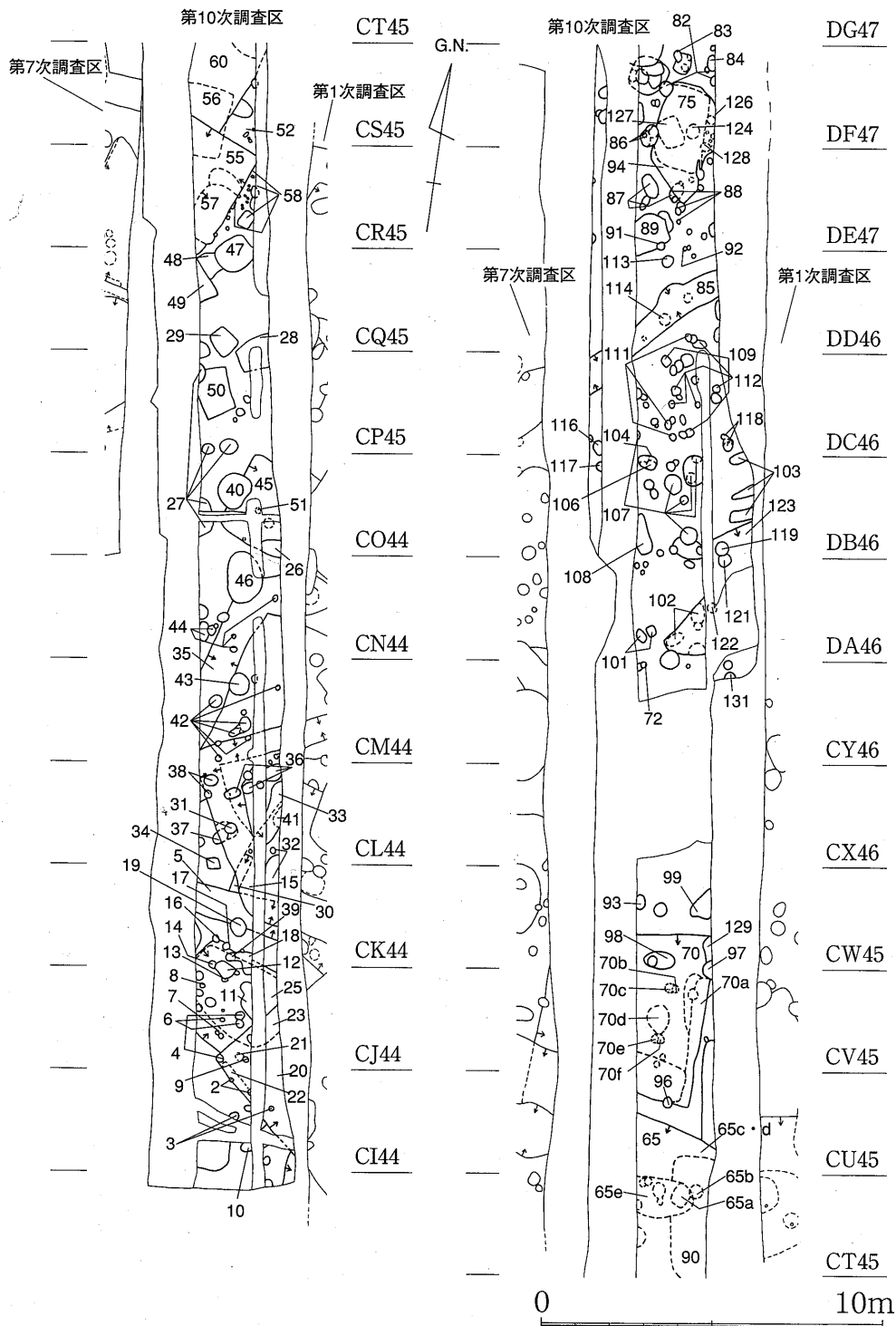


図5 第10次調査遺構配置図 (1) (1/200)

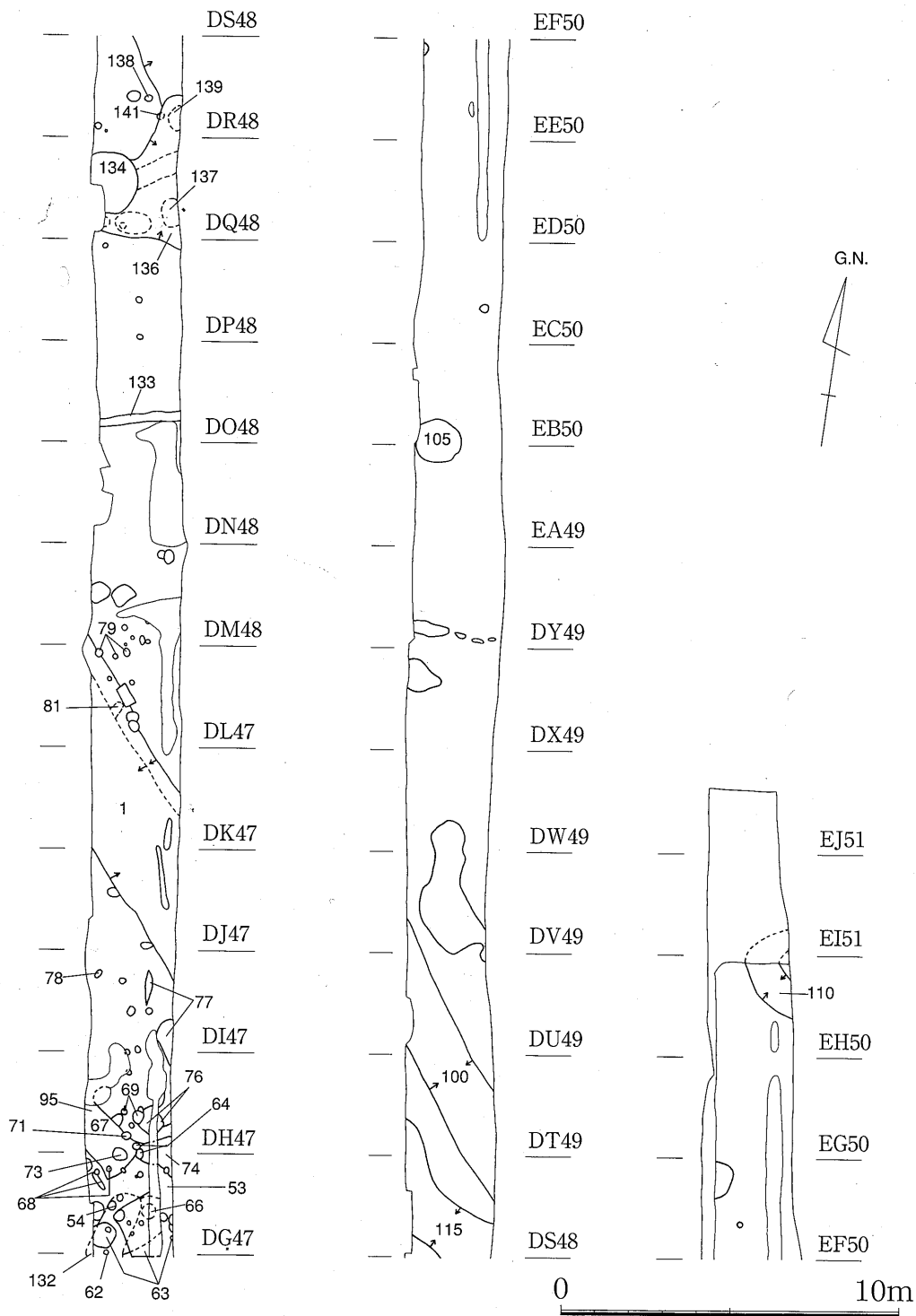


図6 第10次調査遺構配置図 (2) (1/200)

部分に路面痕跡は残存していなかった。このほか奈良期の溝・土壙等が調査区中央～北側にかけて検出されている。

最後に、官道西側溝とみられる前10SD001の溝底において直径20cm強程度の小穴状遺構を複数確認した。これは溝を掘削したときの鋤痕跡とみられる。

鋤で地面を掘削するという事は、まず地面に対して垂直または垂直に近い方向に鋤を突き刺し、鋤先を地中深く押し込み、それから鋤を傾けて土を掘り起こすという作業となる。このことを念頭におきながら鋤痕跡を観察した。

鋤痕跡の平面プランはほぼ円形を呈しているが、詳細をみると、鋤を突き刺したとみられる部分の地山との境界は比較的直線状を呈しており、他の部分は平面プランがやや乱れている。そこで鋤が当たったとみられる直線状の部分に対して垂直にたち割り、断面観察すると、地面を掘りこんで鋤先があたった最下部は鋭角を呈し、土を掘り起こした部分は半月状に土が堆積している状況がみられた。このことは、実験的にスコップを使用して溝底を掘り、埋め戻したものを同様に断面観察した場合も同じ結果が得られた。(なお、溝底はシルト質～砂質の軟質の地盤である。)

こうして得られた鋤痕跡を追ってみると、溝底のみならず溝肩の東側（官道路面側）にも幅1m程度の範囲でも確認され、土層観察とあわせてこの溝がテラス状の段を有することが判明した。また鋤の方向から掘削作業単位を一部確認できたことも大きな成果であった（本文Pl.10-7参照）。

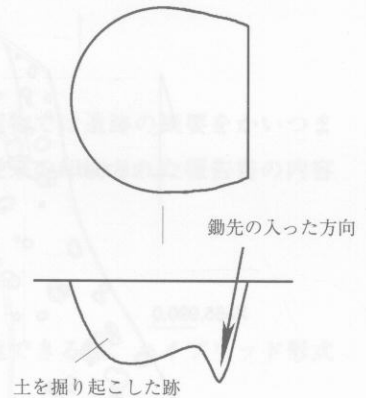
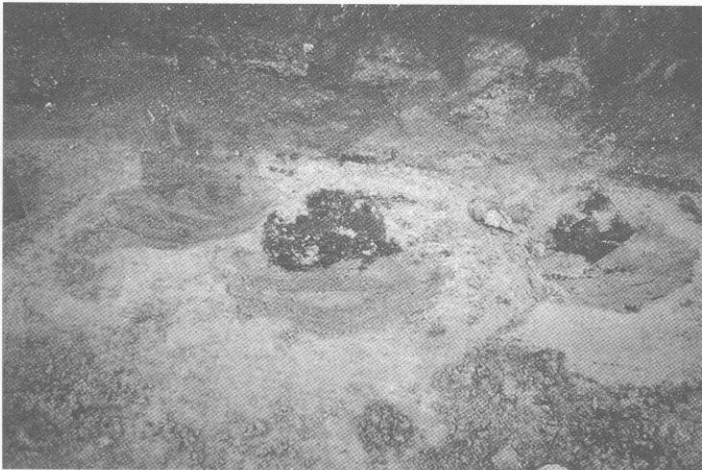


図7 鋤痕跡断面模式図



前10SD001溝底の鋤痕跡断面観察（西から撮影）

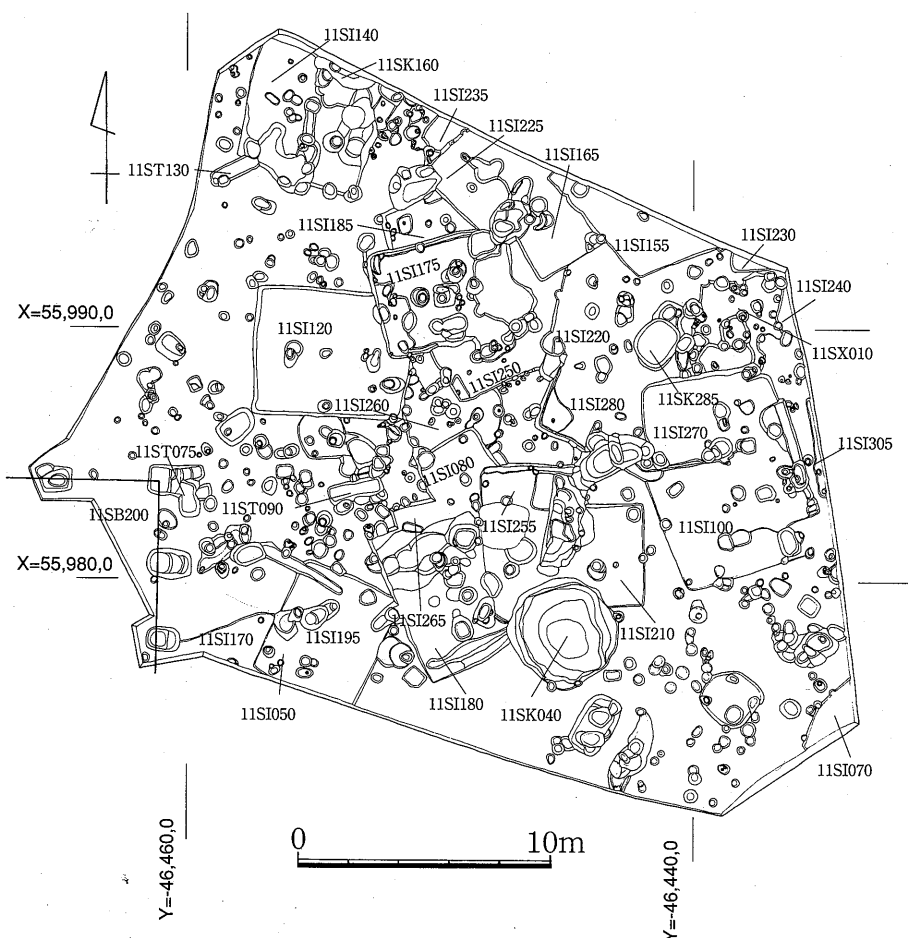


図8 第11次調査遺構配置図 (1/300)

#### 4. 第11次調査

前田遺跡第11次調査の調査区は、前田遺跡第6・7・10次調査地点に囲まれた土地である。この土地は大佐野川の北岸にあたり、宮ノ本丘陵の東裾に位置する。地形は宮ノ本丘陵から東の平野に向かって延びている傾斜地の中位にあたる。遺構は主に黄灰色粘質土層を掘削して構築されている。

以下、時代別に概観していく。

##### 【弥生時代以前】

本調査区内では旧石器時代の遺構、遺物は検出されなかった。縄文時代については、弥生時代の住居内埋土から後期、晩期の土器片が若干量出土している。出土土器の分布をみると、





前田遺跡第11次調査 調査区全景（上が北）

後期の土器片は前11SB100・210・280から、晩期の土器片は前11SB180から出土しており、傾向として調査区中央部東よりに集中して分布していることがわかる。このあたりに当該期の遺構が存在していたとすれば、明確な遺構を伴わない利用形態だったと思われる。これは前田遺跡の前報告で述べられているような小規模なキャンプ地という性格があてはまるだろう。

#### 【弥生時代前期】

この時期に該当する遺構は前11SI255・260・265、前11SK285があげられる。ただし前11SI260・305は積極的な時期比定が難しいため可能性があるという程度にとどめておきた

い。前田遺跡全体からみた場合に本調査地区は、前期前田集落の中心部からやや南西に外れた場所に位置する。それは遺構の展開にも表れており、住居とそれに付随する貯蔵穴という組み合わせとしては検出例が少ないため、判断は付けにくい。集落内の位置づけなどは連接する調査の成果が出された時点で考えていくべきと思われる。

#### 【弥生時代後期】

本調査では当該期の住居が密集しており活動が盛んだったことを思わせる。時期別にみると、後期前半～中頃の住居は前11SI070、中頃～後半は前11SI100.195.210.230、後半～末期は前11SI140.175.185.220.225.270などである。厳密な時期の特定はできないが後期の住居として前11SI170.240.250も含まれる。それぞれの時期で頻繁な建て替えが行われているが、明確な方向などの規則性は認められない。とくに後期から末期にかけては調査区北部に帯状に密集しており、住居の建て替えが盛んだったことを示している。

#### 【古墳時代前期】

前期初頭の布留式段階の住居が多く、弥生時代後期末葉から連続して形成されたと思われる。前11SI120.155.165.180があげられる。ただしこれに継続する遺構は検出していない。

#### 【奈良時代】

8世紀中頃～後半に掘立柱建物1棟、竈付き堅穴住居2棟、大型土坑2個が併存している。前11SB200は正方位に近い振れを持つ大型掘立柱建物で、各々の掘り方の断面形状が有段を持つ特色を有する。同様な構造を持つ掘立柱建物が前田遺跡第1次調査でも検出されている。竈付き堅穴住居は出入口を2棟とも南西方向に向けている。その理由としては前田遺跡第4次調査で検出されている古代官道（西門ルート）と同時期に併存していることが理由の1つと思われる。つまり官道から堅穴住居の入口が直接見えないようにする視覚的な規制が存在した可能性がある。周辺の調査事例と合わせて今後検討していきたい。前11SK040は最終的に



前田遺跡第11次調査SI050床面検出状況（西から）

は8世紀後半から末期に埋没しているが、最初に掘られたのは8世紀前半である。多量の土器が廃棄されていた土坑だが、その大きさゆえ生活に関連する性格とは考え難い。何らかの祭祀に関連した土器を継続して廃棄した土坑の可能性もあるだろう。これらの奈良時代の遺構群は前田遺跡第7次調査の奈良時代の遺構群とほぼ同時期であるため密接な関連性があると考えている。ただし、前11SB200と前11SK090はそれよりも若干先行する可能性を示唆しておきたい。

#### 【平安時代】

古代末以降、隣接する宮ノ本丘陵を中心に展開していた墳墓群は前田遺跡の範囲まで下ってくる。前11ST090は木棺墓で、副葬品から9世紀前半から中頃と考えられ、方位は東へ大きく振れる。前11ST130は削平を受けているため不明な点が多いが、方位の振れが近いため11ST090と同じ時期の木棺墓と推定しておきたい。また前11ST075は副葬品の土器から10世紀中頃の時期に帰属すると思われ方位の振れもほぼ正方位に近い。

#### 【中世】

11世紀以降、土地利用としては鎌倉時代までは何らかの土地利用がされていたと思われるが、ピットや土坑などが主で遺構の性格の把握は難しい。前11SX010は墓の可能性が指摘できるが大きく削平を受けており判断が難しい。それら以後、昨今まで耕作面として利用されていたと思われる。

上記の様に本調査地は縄文時代から中世までの複合遺跡であり、特に注目されるのは弥生時代前期、弥生時代後期～古墳時代初頭、奈良時代の大きく3期の集落としての利用がされていることである。今後は周辺の調査成果と合わせて検討していき、前田遺跡の全貌を明らかにしていくことが課題であろう。

### 佐野地区遺跡群 IX

前田遺跡第8・9・10・11次調査  
太宰府市の文化財第44集

1999年3月15日

発行 太宰府市教育委員会

太宰府市観世音寺1-1-1